

「論理」と「感覚印象」

——「明証的なもの」とは何か——

友 村（種山）恭 子

はじめに（前回の論文との関係）

前回の論文「生の力と知性の希求」⁽¹⁾は、プラトニズムとヘレニズム時代の思想を対比させ、前者が後者に対して、「生」の意味や「知性」の意味について、どういう問題を投げかけたか、あるいは、プラトニズム自身がどういう修正を受けなければならなかったかを、今後、考察するという展望を概観したものである。

プラトンの諸著作に見て取れるのは、感覚は錯覚をもたらし、感覚が巻き込む激情・情動は人々の判断を狂わせ、自分の魂をこうした錯覚・情動に支配されるに任せている酔漢のような人間の魂は無秩序そのものであり、このような人間が政権を握ると、人間の生活の場でもあり、その精神性を養う母胎でもあるポリスは必然的に崩壊する、という主張である。プラトンにとっては、各人の内奥に潜む純粋な魂は、「全体」の秩序の真相を把握するものなので、こうした、魂の「知的部分」もしくは「知性」が、各人の内面においても、ポリス全体においても、指導原理とならなければならないのである。

「知性」の把握するものが、感覚に現れるものよりも、「明確さ」においてはるかにまさる、というのがプラトンの基本的立場である。そして「生」というのも、本来は、魂の「知的部分」こそが内発的に生き、永遠の生に与るものであるのに対し、魂のうちの「情動的」あるいは「衝動的・欲望的」部分は——いわば、フロイトの言う無意識的領域の——衝動のようなものであって、人間

の魂のこうした機能の描き出す「外界」の像は、夢の中のもののように曖昧でありながら——というよりも、曖昧だからこそ、人間の反射的な激情・情動と密接に結び付く、というのである。そしてアリストテレスにおいても「知性」の優位が主張されている点は変わらない。

しかし、ヘレニズム時代に至ると、「明確さ」もしくは「明証的なもの」とは何かについて、改めて議論が沸騰する。そして、人間の「生」全体の中での「知性」の位置づけも、あるいはそもそも「知性」とは何なのか、「論理的」とはどういうことかについても、それぞれがそれなりに説得力を持った多様な議論が渦巻く。

「生きている」とはどういうことなのか、真に「知的に理解する」とはどういうことなのかについて、古代ギリシアの思想家を手がかりに検討するというのが、「生の力と知性の希求」のテーマである。そして前回の論文にも記したように、特に、プラトンと、ストア派および、新プラトン派のプロティノスを取り上げる予定である。

しかし、たまたま今年(1990)、東北哲学会で「Rationalismの行方」というテーマで話をしたので、「生の力と知性の希求」の第2篇に移る前のインターミッションとして、今回は「明証的なもの」とは何かを取り上げることにした。そして、第1、2、3節では、前回の論文を、今回の論文の視点から、若干補いながらまとめることにし、第4節で、ローマ時代の懐疑主義者セクストス・エンペイリコスなどを手がかりとして、ヘレニズム時代の思想家達が「論理」および「明証的なもの」をどう考えたかを展望したい。

1. プラトンの「知性」の意味(1)——社会的現実の中で

プラトンの諸対話篇には、「感覚」や、感覚が不可避免的に巻き込む「情動」に誑かされる精神性を批判し、これを克服しなければならないとする点が基調音のように見て取れる。そして、プラトンのこうした主張の背景には、明らかに、

当時の「民主制」のもとに、一方には政治の実権を手中にする「多数者」の拍手をあびることを主眼とした「民衆扇動家」の演説が聞かれ、他方には、そうした「民衆扇動家」の俳優なみの弁論に熱狂する「多数者」が政治を動かしているという現実があった。⁽²⁾自由市民の共同体を誇るアテナイに生まれたプラトンが——独裁者の支配下の疑似的社会集団ではなく——⁽³⁾節度ある知的な自由人の共同体であるポリスは、どのようにして可能かを終生の課題としたことは言うまでもない。そして、こうした構想のもとに、プラトンは、個々の人間の内面も決して一元的なものではなく、「知性」と「欲望」——あるいは、「厳正・公正な判断者」と「盲目的・衝動的な欲望」が各人に宿っているとし、その中間に、「知性」の味方をして「欲望」を抑えつける、いわば「知性」の護衛役を務める戦士ともいうべき「激情もしくは怒り」を加えて、「魂三区分別説」を提示する。⁽⁴⁾そして、各人の魂の不死なる部分（「知的部分」）は、もともと造物主によって平等に造られているのであるが、地上での生き方によって差異が生じ、⁽⁵⁾「不正な人々」は、生きている間でも、往路はよく走るが帰路は疲弊して皆の笑いものになる走者と同様、惨めな有様で醜態を曝すというのがプラトンの持論だったと言える。

ここでは、「正確に判断する知性」と、「衝動的・盲目的欲望」とが対立させられている。われわれは前回の論文の表題を「生の力と知性の規律」としたのであるが、プラトンの場合、「生の力」は、「欲望」の側にあるものとして位置づけられるものではない。何故なら、造物主によって造られた純粋な魂だけが「不死なるもの」として永遠に生き続けるのであり、これに対して、「欲望」や「怒り」は、前者のような魂が地上で身体に結び付けられた時に、地上で生きる人間にとっては——食欲なども不可欠だから——必要なものとしてやむを得ず神々によって付け加えられた「死すべき種類の魂」だからである。⁽⁷⁾つまり、プラトンには、地上の生活によって魂がどれほど汚れているにせよ、各人の内奥には純粋で美しい魂が宿っているという確信があったと言える。こうして、⁽⁸⁾

プラトンの場合、本来の意味での「生」は、宇宙の造物主によって直接造られたままの純粋な魂について言われ得るものだという⁽⁹⁾ことになり、「生の力」は本来、「知性」として発現するという⁽⁹⁾ことにもなるだろう。

ここには、しかし、問題が残る。

まず第一に、現実のポリスに責任を負う自由民、とりわけ統治者の地位に就くべき者が、造物主から直接賦与された「知性」に従って判断し統治するとはどういう意味を持ち得るか？——地位を利用して利得ばかりを狙う政治屋や、他人の生殺与奪を手中にすることを無常の喜びとする権力志向の独裁者ではなく、「知を希求する人」（＝哲学者）が王となって統治するか、現に王と呼ばれている人々が真に知を希求して探究する（＝哲学する）のでない限り、ポリスにとっても人類にとっても不幸の止む時はないだろうという、プラトンのいわゆる「哲人王」の主張は有名であるが、プラトンはむしろ、個人の内部においても、魂の「欲望的部分」が他の二つの部分と比べてずば抜けて大きくて荒々しい多頭の怪獣のようなものであること⁽¹⁰⁾、ポリス全体においても、魂の「知性的部分」の発達している人がごく少数であるのに対し、「欲望的」人間が圧倒的に多いのが現実であるという点も十分認識していた⁽¹¹⁾。実際また、『国家』に登場する弁論家トラシマコスにとっては、社会の現実⁽¹²⁾に疎いように見えるソクラテスは、鼻水を垂らしっぱなしで拭うという躰も受けていない小僧っ子なみの世間知らずに見えたのであり⁽¹³⁾、また、『ゴルギアス』に登場するこれも弁論家のカリクレスは、ソクラテスに好意を持ちながら、だからこそ、ソクラテスのように、いい年をしておりながら他人と交渉する際の口上も知らなければ、一人前の大人の社会生活にも疎く、アゴラの片隅で数人の青少年を相手にぼそぼそ哲学談義に時間をつぶしているだけの男を見るとぶん殴ってやりたくなるのだとソクラテスに警告する⁽¹⁴⁾。そして『国家』でも、ソクラテスが上に述べたような「哲人王」の発想を持ち出したとき、対話相手のグラウコンがソクラテスに向かって、そんな途方もないことを口にした以上、「決して馬鹿にならない連

中」が血相を変え、大勢で押し寄せてきて、あなたを騷りものにしますよと言⁽¹⁵⁾い、「哲学者」が一般に「役立たず」と言われるという風潮のあったことは、上記の諸箇所その他に見て取れる。⁽¹⁶⁾プラトン自身は、魂の「激情・怒り」の部分に主導権を委ねている権力志向の人物や、魂のうち衝動的に何にでも手を出す狂暴な「欲望」の部分に全面的に引き回されている夢心地の無頼の徒が政権の座に就くと、ポリスは崩壊するという危機感を抱いていた。⁽¹⁷⁾ポリスを船に例えて、船の支配権を握りたいばかりの水夫達が権力闘争の駆引きに血眼になっているような場合を考えると、そうした状況では、季節や風や星のことを研究して方向を定める能力のある、真に舵取りに長じた者は、とかく「星を見つめる男」と呼ばれ、役立たずと呼ばれるであろうが、ポリスにおける「哲学者」の位置は、元来そのようなものだというのである。⁽¹⁸⁾実際またプラトンは『国家』の中で、哲人統治者の知的教育のためには、数学、天文学、音楽理論などが必要だとしているのであるが、それは、こうした学科には、思考(dianoia)を呼び覚ます効果があり、魂を、感覚するがままに錯覚して見当違いの判断を下したり激昂したりする状態から、「真実」(alētheia)へと導くものだからだとい⁽¹⁹⁾う。因に、プラトンが「アカデメイア」を創設した意図が何であったにせよ、この学園が「数学」や「天文学」の研究活動で有名になったのは事実である。

『国家』のプラトンにとって、数学は「哲人統治者」の学ぶべき最高の学ではないまでも、少なくとも必要不可欠な学科だったのであって、「哲人王」の構想がもはや見られない彼の最晩年の『法律』においても、ポリスの自由人の教育にとって数学的知識は「神的な必然性」を持つものともされているのである。⁽²⁰⁾

「哲人王」を頂点とする理想のポリスについては、こうしたポリスは現実に実現され得るものとは考えられないとし、むしろ「理想的な範型(paradeigma)として天上に捧げられて存在するだろう」という言葉が『国家』も終わりに近い、第九巻の末尾に見られ、第十巻には、詩人批判や、死後の魂の運命を描いたエールの物語が収められている。実際、プラトンは、現実の政治の改革を構

想するというよりも、各人の魂を永遠の真実へと転向させることを目標にしていたと言える。そして事実、忌まわしい戦争も財貨の獲得のために起こるのだが、その財貨を手に入れよと強制するのは身体であり、人間が身体に奴隷よろしく奉仕している限り、そうしないわけには行かない、といった言葉が『パイドン』にも見られ、⁽²²⁾『国家』においても、財貨を無際限に獲得しようとするところから戦争が起こると言われており、⁽²³⁾また、法廷での駆け引きに抜け目のない連中や、自分の家系を威張る手合いなどの視野狭量な喧騒に満ちた世界と、永遠的な真実を望見する真の自由と時間の余裕のある「哲学者」の生活流儀を対比させ、地上の人間の世界には劣悪なものがついてまわる以上、「出来るだけ早く、この世からかの世へ逃げて行くようにしなければならない」としている言葉が『テアイテス』にも見て取れる。⁽²⁴⁾すなわち、プラトンの場合、人間各人の内奥には造物主から直接造られた純粋な魂が「知的なもの」として宿っており、魂のこうした知的部分に主導権を委ねている限りの人間の間には、限られた物資をめぐる戦争もなければ、宇宙全体・時間全体から見れば取るに足りない、自分の家柄だとか所有地だとかを言い立てての野卑な争いも存在しないことになるのである。

従って一般的に言えば、「哲学者」にとっては、ポリスの行政のことなど様々な面倒に参与しないのもっともであるが、『国家』で構想されている理想のポリスでは、「哲学者」が統治者とならなければならない。⁽²⁵⁾そしてこのことは、ポリスを、身体にまつわる激情や欲望の赴くままに醜悪な闘争を演じる連中の支配から解放し、平和で協調ある秩序体に構築することを意味する。しかしこの場合、生きている限りの人間には必然的に植え付けられているのだとしてプラトン自身が認めている「激情」「欲望」や、これらを不可避免的に巻き込む「感覚」はどう位置づけられるか？『ティマイオス』の宇宙論では、人体の製作者である神々（諸惑星）が人体に「魂の死すべき部分」を植え付けた時、例えば「欲望」の種族は、とにかく食っていればおとなしくしているので、神々はこれを

鉢桶とも言うべき胃袋のあたりに住まわせ、またこの種族を暴走させないためには、「言葉」で言って聞かせても無理なので、神々は「知性から来る考え」を映像にして映し出す肝臓を考案し、これが甘くて滑らかになったり苦くてざらざらしたものになったりして、「欲望」を宥めたり威嚇したりするように仕組んだと語られている。⁽²⁶⁾つまりこうした議論において、プラトンは、個人の魂の「欲望」「情動」の部分や、またポリスにおいては、魂のこうした部分が肥大している人々については、こうした人々や、魂の部分は、現実の世界で生きる存在にとっては必要悪のようなもので、切って捨てるわけには行かないが、とにかく家畜のように餌を与え、適当に叱って躾けることで、「知性」を煩わせることがないようにしなければならないと考えていたと言える。

因に、ポリスの一体性を求めるプラトンの理想を批判して、「家」(oikiā)ならぬポリスの規模の共同体 (koinōniā politikē) は、種類の違った人間から成り立っているものなのだとするアリストテレスは、家畜にとっては人間に支配される⁽²⁷⁾のが、家畜自身にとっても救いとなるが、それと同様、他人に支配される⁽²⁸⁾のが、本性上、当人にとっても善いような人間が現実にいるのだとする。しかしプラトンが、魂は、原初には等しく造物主によって造られながら、地上での生き方如何でさまざまに変質するのだとしている点はわれわれが上に見た通りであるが、⁽²⁹⁾現実のポリスを考える場合には、特に貧富の差が人間の魂を屈折させる点を、⁽³⁰⁾プラトンは強調する。従って『国家』では、少なくともポリスの防備・治安を委ねられている「守備者」の階層には、私有財産禁止、配偶者共有という常識はずれとも見える発想が展開され、⁽³¹⁾もっと現実的な制度を構想している『法律』においても、⁽³²⁾金銀の私有禁止、財産の最低限度額と最高限度額の規定、財産の公的管理などが提案される。こうしたプラトンの提案は、本来は天上に根ざす純粋な人間の魂を屈折させる外的要因を可能な限り排除し、真の意味での自由人の共同体としてポリスを構想するのを狙いとしたものと言える。

しかし——今日、もしもこうしたポリスが実際に実現していたとすれば、大

勢の民衆がその城壁を乗り越えて、壁の向こうの「贅沢国家」⁽³³⁾へ逃亡しただろうという点は別としても——プラトンの構想しているようなポリスを具体的に実現するとなると多々不都合が生じるだろうとして、アカデメイアでのプラトンの直接の弟子アリストテレスもすでに批判している。——例えば、財産の共有や共同生活にしても、一時的に生活を共にする旅行仲間でさえも、些細なことで喧嘩しがちだという例からも見られるように、かえって人々の不平・不満を引き起こすだろうし、妻子の共有の発想に至っては、人々の間に一体感が生まれるどころか、「私の父」「私の息子」とさえ呼ぶことの出来なくなる社会では、互いへの心遣いも希薄になるだろう、などというのである。⁽³⁴⁾

実際、プラトンの構想した「貧富の差もなく、協調ある一体性を持ったポリス」は、現実にはほとんど実現不可能とも思われ（強力な秘密警察を擁する政権のもとでか、あるいは、何か宗教団体の場合は別として）、事実、プラトン自身も、少なくとも『国家』においては、そこで構想された「理想のポリス」も「理想的な範型として天上に捧げられて存在する」と言っているのを、われわれは上に見た。

われわれがここで注目したいのは、こうしたポリスを構想する際のプラトンが、人間の本性はもともと知的なもので、こうした醒めた知性に主導権を委ねない限り、個人においてもその精神は夢見心地の愚かな狂ったものとなり、ポリスもまた崩壊すると考えていた点である。「知性」が物事の真相を把握し得るものであり、「知性」が造物主から直接造られたものである限り、同じ造物主の被造物である宇宙全体の構造や、その宇宙の一部である人間の構造も「知性」によって把握され得るという確信が、プラトンにはある。そこでわれわれとしては、第3節では、プラトンの場合、「知性」の役割あるいは機能はどういうものとして考えられていたかという点に注目することにするが、次節ではなお、以上の問題をめぐって、宇宙論との関連で、若干の点を挙げておきたい。

2. プラトンの「知性」の意味(2)——宇宙論との関連で

家畜は人間に支配されるのが家畜自身にとっても有益であるが、それと同様、人間においても他人に所有されるほうが本人にとっても有益であるような「本性上、奴隷である人」がいる——こうした見解がアリストテレスが『政治学』に見て取れることは、われわれが前節で見たところであるが、この箇所でのアリストテレスの言葉をもう少し補うと、次の通りである：——「身体にとっては魂によって支配されることが、また魂の情動的部分 (to pathētikōn morion) にとっては、知性 (nūs) や論理的部分 (to morion to logon ekhon) によって支配されることが、自然に従ったことでもあり有益なことでもあること、従って、これらが平等になるとか、逆転するとかすると、あらゆるものにとって有害になるということ、これは明かである⁽³⁵⁾」。そして彼は「奴隷」について次のように述べている：——「魂が身体と、人間が動物とかけ離れているのと同じくらいに、他の人々から、劣ったほうにかけ離れている人々（こうした人々というのは、その働きが身体を使用することにあり、また、精いっぱい、これしか出来ない人々のことであるが）は、本性上の奴隷であり、彼らにとっては、もし上記のような劣ったものによって支配されるほうが善いのなら、そのような支配を受けるほうが善いのである。何故なら、他人のものであることの出来る（だからまた、他人のものである）人間、理というもの (logos) にはただ感知する程度に関与しているだけで、自分で理を持っていないような人間は、本性上、奴隷だからである⁽³⁶⁾」。そしてアリストテレスはこれに続けて、身体においても、自然は、自由人の身体と違って、奴隷の身体を、労働に向くように作ってあると言い、確かに、自由人の魂を持つ奴隷がいることもあろうが、身体に関してだけでも、大差があるとすれば、劣った者が優れた者に奴隷として仕えるのは当然だと、誰でもが言うだろう、と述べている。

生物界について飽くことなく探索し、動物の生態に博識なアリストテレスは、

この場合にも、動物の世界にも支配―被支配の関係が見られるのだとしているのであるが、しかし——今日、公然と発言すれば、四方八方から袋叩きにされそうな、こうしたアリストテレスの見解については、別の機会に検討することにして——われわれは、観察されるままの「自然世界」をモデルとするのではなく、むしろ、われわれの内なる「知性」は天上に根ざすと考えたプラトンが、その観点から構想した「宇宙論」の中で、人間知性がどのように位置づけされているかに注目したい。

『ティマイオス』は、『クリティアス』（このアトランティス物語は、『国家』で構想されたような理想のポリスの骨組みにいわば肉付けして、現実活動する様を描こうとしたものである）の序論をなすものとして、宇宙全体の中での人間の位置や自然的人間の構造を試論的に叙述しているものである⁽³⁷⁾。この宇宙論には、「宇宙の魂」が宇宙全体を包括しているからこそ、宇宙内部の火、水、空気、土という四種の物体が種類別に分かれたまま運動を止めてしまうようなことにはならないのだと言われている箇所があるが、この箇所の叙述はきわめて機械論的である⁽³⁸⁾。『パイドロス』のプラトンは、他から動かされて他へと運動を伝える物体的次元のものは、いつか動きを止める時が来るだろうが、「魂」のほうは「自己自身によって動かされる」のが本来のあり方であり、従って、「魂」こそが宇宙全体の運動の出発点でもあり、また不滅のものなのだと主張している際に、もしそうでなかったなら、宇宙の全体は「必ず崩壊して動きを停止し、二度と再び、生じて来るために最初の動きを与えてくれるものを、持たないことになるだろう⁽³⁹⁾」と言っている。そして、「魂は自分で自分を動かす動き」だとする、この『パイドロス』の議論が『法律』に受け継がれて、自発運動をする「魂」こそが宇宙全体の運動を最初に生じさせる始原だと言われており⁽⁴⁰⁾、だからこそ、宇宙を動かす第1次的な運動は「意欲」「配慮」「憎しみ」「愛」といった魂に特有のカテゴリーに即したものであり、これに対して「増大」「減少」「分離」「結合」といった物体特有のカテゴリーに従った運動は、第2次的なもので

ある。従って、魂の性格、配慮などのほうが、物体の長さ、幅、深さ、力よりも先のもので、前者が後者を導いているのだという議論が展開される。⁽⁴¹⁾

人格的なカテゴリーのほうが物的・機械的な運動連鎖もしくは因果関係の上位に立つという考えは興味深いが、しかし、天や地の全てを動かしてそれを支配する強大な魂は、整然と回転する天球や諸天体の運動に顕現しているような規律正しい「知的」で「最善の」魂だといっているのである。⁽⁴²⁾

こうして、『ティマイオス』と『パイドロス』と『法律』とでは宇宙全体の運動と魂の関係についての叙述に相違が見られる。しかし、プラトンはすでに『パイドン』においても、「善なる力」がこの自然世界を可能な限り「善い」ものにする目的で、物的必然性をもって連鎖する物的次元のものを配置し導いているはずだとし、これに対して物的次元のものは「善き世界」を構築する際の「必要条件」に過ぎないであろうとして、こうした「善なる力」に統括されているものとする自然解釈を求めていた。⁽⁴³⁾

われわれはここでは、プラトンの宇宙論を解釈する上での詳細な議論に立ち入ることは控えたいと思う。しかし、上に見た限り、『ティマイオス』、『パイドロス』、『法律』の議論から、次のような点が確認されるものとしておきたい：(a)プラトンにとって、人間の「魂」は、身体的・物的な運動から派生するものでもなければ、こうした外的運動の作用に侵食されるがままに変形されるような——つまり、外的環境によって規制され習慣付けられる通りに形成されるだけの——ものではなく、「宇宙の造物主」に直結する内発運動そのものとして、独自の運動原理を持つ。(b)人間の内奥のこの純粋な魂は、天球の回転運動にも似た、規則正しく整然とした運動を見せる。数学、音楽はこうした純粋な魂の運動と密接な関係にある。⁽⁴⁴⁾(c)こうした純粋な魂は、異なった要素間にどのような協調が可能であり、全体的秩序がどのようにして成立し得るかを認識する能力があるので、個人においても、こうした「知性」と名付けられ得る要素が、主導権を握るべきであり、ポリスにおいても、「知性」が主導権を握ってい

るような人が、統治すべきである。⁽⁴⁵⁾

すなわち、人間の魂のうちの純粋な部分は、数学的秩序に従った端正なリズムと旋律に対応するような運動を持つものであり、人間は、こうした知的能力を発動すれば、それぞれ異質的に見える多くのものが、個々独自の特質を保持しながら一つに結び付いている様を、また、一つの「全体」の中にも明確な分節があることを把握し得るのであるが、⁽⁴⁶⁾こうした能力こそが、「統治者」に要求されるのだと、プラトンは考えていたと言えるのであり、『ティマイオス』では、現に自然世界においては、純粋に知的な統治者（神）が、多の特質を生かしながら「1」をなす宇宙を構築し統合しているという構図を、試論的に描いたものと言えるだろう。

しかし、こうした宇宙論においても、自然世界を満たす全てのものが「知的な秩序」に完全に吸収される、もしくは「数学的・論理的図式」で説明され尽くすことにはならないようである。現に観察されるがままの事象を適当に関連付けて、すべては「なるべくして生じた」とし、戦争、殺人の背後にも「神の御心」なり「自然の必然性」なりを観想もしくは空想するという態度は、プラトンには見られない。プラトンは、むしろ、「善い」とはどういうことかを明証的な知識で把握しながら、真に健全なポリスのあり方を構想し、所与の素材を適切に配置しながら「可能な限り善いもの」を実現しようとしたのだと言えるのであり、これは彼の宇宙論の図式にも反映している。『ティマイオス』の造物主（デーミウールゴス）は、「知性の働きによって、言論の助けを借りて把握されるもの」（to noēsei meta logū perilēpton）をモデルとし、無秩序に動揺する素材（"horaton"すなわち「可視的なもの」と表現される）を受け取って、これを無秩序から秩序へと導き、こうして宇宙を生み出したと言われ、こうして生じた自然世界は「思惑（doxa）によって、言論抜き（alogos）の感覚の助けを借りて思いなされるもの」と言われる。そして、前者すなわち思惟の対象は、「常にあるもの、生成することのないもの」あるいは「常に同一を保つもの」

であり、後者すなわち感覚対象は、「常に生成していて、あるということの決してないもの」あるいは「生成し消滅していて、真にあるということの決してないもの」だとされる。⁽⁴⁷⁾

この箇所解釈に関する、古典学者の様々な議論にはここでは触れないことにするが、とにかく『ティマイオス』では、「知的な造物主が、動揺する素材に秩序を与えて、現実の自然世界を構築した」という構図が基本であるのは疑いないところであり、またこの場合、こうした造物主がこの世界を可能な限り「善い」ものにしようと望んだと言われている点をも確認しておかなければならない。⁽⁴⁸⁾『パイドン』においても、こうした「善」を原理とする自然解釈が求められていたことは上に述べたが、プラトンは、『パイドン』においては、この原理に基づいて積極的に自然の事物の成立ちを説明することは諦めていた。⁽⁴⁹⁾

しかし『ティマイオス』では、「思惟の対象」をモデルとして構築されてはいても、所詮「似像」(eikōn) でしかない「感覚対象」である自然世界については、「似た言論」(eikōs logos) しか成り立たないのだという前提のもとに、⁽⁵⁰⁾ プラトンは、仮説的（もしくは遊戯的）に、「塩」はどのようにして生じるかとか、「陶器」はどのような過程を経て形成されるかといった説明を試みているのであるが、この場合彼は——神の御恵みで「塩」が与えられたとか、神が人間に陶器を造る知恵を授けたもうたとかいった説明ではなく——火、土などの四種の物体のどういうメカニズムが「塩」や「陶器」を形成するかの説明を試みているのである。⁽⁵¹⁾ 造物主がこうした物体的次元に介入するのは、「素材」の世界を満たして、無秩序に動揺している火や水の「痕跡」⁽⁵²⁾ ——これは無秩序に動揺する諸力でしかなく、そのままでは、種類別に分離しただけであろうが——の各々に幾何学的形態を与えて互換を可能にしたという点だけである。⁽⁵³⁾ このように「知的造物主」もしくは「知的作用者」が「素材」の世界に介入することを、プラトンは別の箇所で「知性 (nūs) が必然 (anankē) を説得する」というように表現している。⁽⁵⁴⁾ この言葉は、火や水のメカニズムやそれら四元から構成され

ている物体の諸特性を説明している第2部(47E-69A)の冒頭に見られるが、第3部(69Aff.)の人体の説明では、プラトンの宇宙論の性格がもつとはっきりする。造物主(デーミウールゴス)から人体及び「死すべき種類の魂」の製作を委ねられた神々(諸天体⁽⁵⁵⁾)は、四元を混ぜ合わせて「髓」を造り、滑らかな土を捏ねて髓に浸し、それから刀でも鍛えるように火に投じたり水に潜らせたりして骨を仕上げるなどして、ロボットでも製作するように人体を造るのであるが、⁽⁵⁶⁾こうして構成された人体においては、「死すべき種類の魂」は生理機能にもほとんど関与しない。呼吸も、神々が考案した蒸気機関なみの「呼吸装置」によって、体内に火(熱)がある限り、自動的に作動し、「嚥下」の現象も、空気の一部が押されて場所を変え、その後に空虚が出来ると、たちまち周囲の空気がその後を埋めるという「まわり押しの説」(後の「空虚充填説」に類似していると言われる)⁽⁵⁷⁾で説明される。「死すべき種類の魂」については、食っていさえすればおとなしい「欲望の種族」は秣桶ともいうべき胃を当てがってあるという点は第1節で述べたが、際限ない食いしんぼうのこの種族の過食によって、全体としての人間が病気になってはいけないとの配慮から、神々が食物の通過を長引かせるように腸をぐるぐる巻いたとか、「知性」の味方ではあるが、やはり「死すべき種類の魂」である「怒り」の種族は番兵詰所である「心臓」に配置し、これが激する時に寛がせるためのクッションとして「肺」が当てがわれているなどといった説明が見られるのである。⁽⁵⁸⁾

「魂」(プシューケー)の機能を生理的・心理機能にわたって幅広く論じているアリストテレスの『デ・アニマ』と違って、機械装置で動いているような人体を描いている『ティマイオス』の生理学・病理学は、⁽⁵⁹⁾生理機能について上記のように、原子論的な空気充填説を適当に利用したり、医学面ではまた、エンペドクレス学派の説やコス学派の体液説を利用したりしながら、⁽⁶⁰⁾プラトンが遊戯的に発想を楽しんでいるもののように見えるのであるが、われわれはここでは、この発想を、医学史の中で位置づけようとは思わない。

今はむしろ、プラトンにとって、人間の純粋な知的魂が洞察するはずの、全体の秩序(宇宙の規模では宇宙全体の、人間社会の規模ではポリス全体の秩序)とは何であったかに関して、先に挙げた(a)(b)(c)に加えて、次の諸点を挙げておきたい：(d)宇宙全体にとっても、健全なポリスにあっても、「善い」ということが実現されているのは、その全体を構成している各部分がその特性を保持したまま、必然的に協調している有機的組織である。(e)しかし、数学的に、例えば「比例」を通じての結合(61)(これはむしろ、自然世界の天体の運航だとか、四元の相互変換のあり方などに見て取れる)を洞察するのは人間知性であろうし、また離ればなれの「多」をなす「形相」が「一つの形相」によって貫かれているのを見抜くのは、「ディアレクティケー」に通じた哲学的知性であろう。従って、こうした「協調ある全体」は、数学的能力を素地とし、「多と1」の関係を把握する高度の哲学的能力を持った少数者にしか出来ないことである。(f)メカニズムに従って動く物体は、「必要条件」として、宇宙の造物主の工作に役立てられ得る。ポリス全体の中での「欲望の種族」の人々も、生産業や商業に携わる階層として、ポリスの必要条件を満たすのであろうが、こうした人々が「統治」に関与することはポリスの転覆につながる。また、ポリスを自由民の共同体として成立させようとするなら、すべての自由民に対して、「激情」や「欲望」に駆られる粗野な精神性が彼らに忍び込まないように十分配慮すべきである。(62)

プラトンは明らかに、欲望の塊のような人物や、独裁者志向の横暴な人物に政権を委ねるのは、ポリスにとっての破局だと考えている。端正な音楽で優美な感受性を養い、数学に顕現しているような「明証的な必然性をもって相互に関連し合っている有機的体系」を把握する能力を養うことが、真の意味での自由人の共同体に不可欠だと見ているのである。

しかし、地上に生きる限りの人間に不可避免的に備わっている「情動」「欲望」といった「死すべき種類の魂」に支配されることのない自由人の共同体などは、「あの世」でしか望めないものかも知れない。実際、人間が自分の魂を、自己

の内奥へと凝集させて、ついに魂が身体から離脱する時にはじめて、この宇宙全体の存在の根源でもあり、われわれの「知性」の由来する源泉でもある「善」に触れ得るのだと、ローマ時代の新プラトン派、プロティノスは言っており、また彼は、実際に、こうして「永遠」に触れた経験が何度かあると語っているが、プロティノスについては、別の機会に言及する。むろん、われわれの内奥の純粋な魂が、「魂自身の住处」として、純粋な知性の把握する世界を明証的に把握するとしたら、そして、「真の存在」によって魂が満たされる快樂が、ほんものの快樂であるのに、そういう快樂を味わったことのない連中が、幻影のような快樂を目当てに間違いじみた情欲に駆られているのだとしたら、そういう連中は、「政治を転覆させる悪党」というよりも、「自分で自分のことも知らず、ほんものの快樂も知らない気の毒な人々」⁽⁶³⁾だということになる。

プラトンの快苦あるいはその他の情動の分析は、きわめて緻密で穿ったものと言えるが、⁽⁶⁴⁾しかしプラトン自身、人間の心理描写を通じて、人間を教導しようとする説教者ではなく、「人間の本性」や「宇宙の真相」を探究する哲学者の立場にいるはずである。プラトンの言う「真実在」や「自己の内なる真に存在する部分」という言葉にしても、これに厳かな抑揚をつけ、説教壇から「プラトン教の信者」に説教でも垂れるなら、それなりに教団の善男善女が結束して、「理想のポリス」を形成したかも知れないし、その教団の「教典」に記されている「正義」や「善」の定義が、その教団では「真実のもの」として通用し、これを受け付けない余所者は「真実を知らない愚か者」とされて排除されたかも知れない。そして、その教団に参加している人々は、最初は雲を掴むような困惑を覚えながら「善」だとか「真実在」だとかの定義を聞いていたとしても、やがてその一つ一つに心服して頷く身振りが習性となり、また最初は無理に自分で掻きたてた「感動」を持続させるように自分でコントロールするコツが身につくと、その一種独特の心理状態こそ「真実在」に触れた証しなのだと信じ込み、その集団では、自分達だけが「真実在」のあり方に即した生き方をして

いるというエリート意識が通用することになるのかも知れない。

しかし、根拠もなしに大衆を「説得する」ということは——「プラトン教の教祖」ならぬ——本物のプラトンにとっては、偽の知識をちらつかせて無知な大衆に魂を売らせるソフィストのすることである。

さてわれわれは、プラトンの「医学説」や「天文学説」を取り上げて、科学史の立場から、プラトンが何らかの貢献をしたとかしなかったとか言うつもりはないし、また「天上の善のアイデア」に、具体的な意味も不明なまま、切札の位置を奉ることもしないでおきたい。われわれはむしろ、「信念」ではなく、「明証的なもの」あるいは「明証的に把握される知識」とはどういうものとしてあり得るかという問題を、プラトンとともに考えることを試みたい。

というのは、これは改めて別の機会に言及するが、特に政治面との関連で、20世紀になって、「全人類の融和」がどうして可能かを考えたホワイトヘッドやベルクソンが、興味深い見解を述べているからである。数学者であったホワイトヘッドは、プラトンの発想を貴重なものとして度々引合いに出しながら、「人間同胞」の観念は、はるかな上方から、「人類」を駆り立てる推進力として作用し、具体化される度に、その局限された時代や地域の条件のために歪曲し、紆余曲折の道程を辿りながら徐々に社会を変えて来たと言⁽⁶⁵⁾い、これは生まれる前に見ていた「美」のアイデアを想起し、「美」への憧憬によって魂に翼が生えるというプラトンの『パイドロス』の物語⁽⁶⁶⁾や、また、個々の美しい恋人への熱情から次第に上昇して、最後には「永遠の美」へと開眼する道程を描いている『饗宴』の物語⁽⁶⁷⁾を思わせる。しかしホワイトヘッドはプラトンと違って、「情動」(emotion)に積極的な意味を認める。「観念 (ideas) の歴史を考察するに当たって、私としては、単なる知識という概念が高度の抽象概念であること、そして、そのようなものは考えないようにしなければならないと言⁽⁶⁸⁾いたい。知識はいつでも情動・目的という付属物を伴っている」。

またベルクソンは、自然状態の人間は、蟻か蜂のような集団を構成して、部

族闘争に終始するのが関の山だとし、そうした自然的人間の社会では「支配者」と「被支配者」の関係がひとりでに成り立っているものであって、「民主主義」は、最も反自然的なものだと言う。そして、人類全体を破滅に追い込むこうした動物的な閉鎖的精神から脱却して、「全人類の融和」を考えようとするなら、それは「部族の神」を崇める原始宗教でなく、キリスト教のような「大宗教」の宗教的直観を俟つしかないと言っているのである。⁽⁶⁹⁾

そこで、プラトンにとって、「信念」でない「明確な知識」と、「宇宙の調和」を洞察する視点はどう関係したか、また『国家』あるいは『法律』で構想されている、ポリスの制度あるいは法律は、「生きている実物の人間」——これを全面的に「調教する」などは不可能に違いない——の本性にどこまで即応しているかについて、次節で、ある角度から検討したい。

3. プラトンの「知性」の意味(3)——「実物」との関係で

プラトンを「哲学的探究」へと駆り立てた要因の一つとして、われわれがここで挙げたいのは、誰かが「……であるのだ！」と絶叫するのを聞くと、そのようにも思えるし、また、「否、絶対にそうではない！」という誰かの努号が聞こえれば、それもそうかと思えて来るような精神状態の分析という点を挙げたい。むろん、こうした精神状態は、話題となっている当の対象そのものをよく知らない人々に起こるものである。むろんこうした場合、自分の名を高めたいというのが本音の人でも、「ポリスのため」というのを建前の議論とするだろうし——第一、「ポリスを崩壊させること」を意図してポリスの既存の議会に潜り込む人があるとしても、破壊を建前として演説するような下手なことはしないだろう——そこにおのずと規準が生じる。⁽⁷⁰⁾

『ゴルギアス』に登場するゴルギアスは、「弁論術」は最高に善いものだとする。確かに、建築家も医者も体育教師もそのそれぞれの専門分野——資材の強度だとか病気の診断と治療法だとか均整のとれた身体を形成する訓練法だとか

——については知識を持っているが、しかし、港湾の施設だとか城壁だとかを建築すべきかどうかは、職人の意見が左右するものではなく、政治家が提案するもの⁽⁷¹⁾だと言う。確かに、ポリス全体を展望して政策を構想し、民主政治においては、議会に提案するのは「政治家」の機能であろうし、「弁論家」というものも、個々特殊な分野には素人である議員にも納得できるように「説得」するのがその機能だと言える。

しかし、『ゴルギアス』中のゴルギアスは、次のように言う：——弁論術が最高に善いもの⁽⁷²⁾だというのは、この技術を備えているということで「言論によって……法廷では裁判官達を、政務審議会ではその議員達を……説得する能力が備わるということなのだ。しかも、君がその能力を備えているなら、医者も君の奴隷となるだろうし、体育教師も君の奴隷なるだろう。それからまた、あの実業家とやらにしても、実は、他人のために金儲けをしていることが明らかになるだろう。つまり、自分のためにでなく、弁論の能力があり、大衆を説得することの出来る、君のために金儲けをしているということがね⁽⁷³⁾」。歴史上の実物のゴルギアスが、このようなことを人前で公然と言ったかどうかは定かではなく、むしろプラトン特有の、何らかの発言の根底に潜む「深層心理」を引き出して表現するという手法で、こうした言葉を作中のゴルギアスに語らせたとも言えるだろう。しかしいづれにせよ、プラトンが問題にしているのは、ポリスの現状を把握してもいなければ、ポリスの将来を考えたこともない弁論家が、大衆の耳をくすぐるような言辞で、これまた、ポリスの具体的状況にも将来の展望にも無知な素人である議員の喝采をかちとって、本人は虚栄を満ちし利得を稼ぐとしても、ポリス（それが自由人の生活の場でもある）を崩壊に導くという点である。

こうした時プラトンが、ポリスも個人の偶然的な集合体ではなく、それが成立するには、ある必然的な条件があると考えていたことは明かであり、彼はしばしば、ポリスを人間の身体と比較する⁽⁷⁴⁾。そしてこの『ゴルギアス』では、身

体を実質的に美しく仕上げる「体育術」には、ポリスを実質的に健全に仕上げる「立法術」が相当するとすれば、身体を美しく見せかけるだけの「化粧術」に相当するのがソフィストの術であり、また、身体面で健康を目的として時には荒療治も辞さない「医術」に、「司法術」が相当するのだとすると、身体の世話をしているように見せかけながら実は相手に迎合している「料理術」に相当するのが「弁論術」だということである。⁽⁷⁴⁾

そしてこの場合、プラトンが問題にしているのは、ソフィストや弁論家もてはやされ、相手に迎合しながら巧みに扇動し、その言葉に拍手を送る「多数者」が政治を動かしているという現実であった。従って、身体に健康に比すべき、ポリスの健全さの構造とはどのようなものかということから、プラトンは探究を始めなければならなかった——というところに、われわれは、プラトンを「実物」探究へと駆り立てた一つの要因を見たいのである。

まさにポリスを、最小限の必要条件を満たす「共同体」の構造を検討するところからはじめて、人間の本性と関連させながら理想のポリスを構想している『国家』で認識論が展開されている箇所のうち、「線分の比喩」⁽⁷⁵⁾では、人間の認識能力のうちの最下位は「影像知覚」(eikasiā)だとされ、それは影だとか水面に映った影像を捉えている精神状態だとされているが、これは「何を」感知しているのかという意識もなく、自分がその都度感じるがままに、その都度とりとめもなく空想し——まるで麻薬患者のように——酔漢のように反応している精神状態を意味しているのだと解しておく。⁽⁷⁶⁾

エレア派の論理では、「生成」と「消滅」は「無→有」「有→無」を含意する以上、こうした混乱した観念を許すべきではなく、「不性不滅」「不動不変」のもの、ただ「ある」とのみ言われ得るのが「有」であり、感覚に現れ、動揺する世界に誑かされるのは迷妄だとする。⁽⁷⁷⁾ プラトンに対するエレア派の影響は大きいが、しかし、「厳密な論理に従って把握される内容を、真にあるものとして規定する」というような一種の形式主義や、あるいは「永遠の真実在に触れ

るためには、感覚に惑わされないよう魂を自己の内奥へ凝集させなければならない」とする一種の神秘主義（これはむしろ、プロティノスに見られる傾向である）は、プラトンの方向とはやはり一致していないと考えたい。むしろ、日常の「言葉」が指し示していながら、われわれがその「言葉」から連想する表層の観念連合を越えた「何か」（つまり、既存の言葉では表現し尽くすことも出来ないし、消去することもできないもの）が厳然としてあるとして、これをものようにして把握するかの方が、プラトンの重要な課題だったといえるだろう。

ところで、「線分の比喩」において、「影像知覚」の上位に来るのは「確信」（*pistis*）であって、これは自然の動植物や人工の事物そのものを知覚する能力である。もしも「感覚されるもの」が、迷妄を描き出すだけの「感覚」の捉える内容でしかないのなら、「影像知覚」も「確信」も同列ということになるだろうが、しかし、プラトンはまた、画家や詩人のように「模倣」を仕事とし影像を描く者よりも、寝椅子や靴を製作する職人のほうが真実に近いのだと言っており、こうした場合にも、プラトンは外界にあって頑強な抵抗を示す「何か」⁽⁷⁸⁾の存在を前提していると言えるのであり、そうした抵抗に触れているかいないかで、精神状態にも相違が生じると考えていたように思われる。

以上の「影像知覚」と「確信」は、しかし、いずれも感覚的能力であって、「線分の比喩」では、この両者と一線を画して、思惟能力が置かれ、そのうちの一方が「(悟性的) 思考」(*dianoia*) であって、その把握する対象は、数学的对象（数や図形）である。数学が理想のポリスの守備者を教育する上に必要不可欠な理由として、こうした学科は魂を真実在へと導くという点が『国家』で挙げられているのであるが、⁽⁷⁹⁾それが導く先の「真実在」の意味については次に検討することにして、ここでは「戦士にとっては軍団を編成するためにそれを学ぶ必要がある」⁽⁸⁰⁾とも言われている点を付け加えておく。しかし、数学も「真実在」探究の最高の学ではないとして言われていることから、われわれは「真

実在」の意味を検討することにしたいが、それは次のようなことである：——数学者は、奇数・偶数、図形、角の三種類といったものを機知のものとしなして前提し、それを仮説として立てて、そこから整合性に従って下降するだけで、その仮説の根拠を自分自身にも他人にも説明しようとしない。さらに彼らは目に見える形象を補助的に使用するが、こうしたものは、数学者が本来対象とする「四角形そのもの」「対角線そのもの」などを原物とすると、その「似像」のようなものでしかないのだ。⁽⁸¹⁾プラトンはここで「形象」を補助手段としている幾何学に不満を漏らしているさい、幾何学をも論理的命題で表現するような純粹抽象の学を求めていたと言えるだろう。そしてそれも、「仮説から整合性に従って下降する」というものでは「真実在」に触れることは出来ないとする。

そして、最高の認識形態は、仮説そのものの根拠を求めて上昇し、「もはや仮説でないものにまで至る」方法だとし、こうしてはじめて「万有の始原」に到着することが可能となるのだとし、この方法が「ディアレクティケー」だとし、これが「知性的思惟」(noēsis)と呼ばれる。⁽⁸²⁾ここでは、これが「1と多」の関係⁽⁸³⁾を求める方法だとして明言されているわけではないが、この「万有の始原」と、知性で把握される「形相」(eidos)は連絡していると言われており、われわれはこうした発言から、プラトンは次のような構想を抱いていたのではないかと推測したのである：——彼は、数や図形の必然的な相互連関を展開して見せる数学の方法を「知的思考を発動させての方法」だと考え、一方では、数学を「図形」など不透明さを残す「補助手段」から解放して、純粹に「形相」間の関係を考察する学であるべきだと考え、他方、数学にはもう一つ、仮説を先に置いて下降するという方法が欠陥となっているが、その各々の仮説そのものを「形相」間の必然的な相互連関の中に位置づけ、こうして個々の「仮説」を「形相」間の有機的連絡の中で根拠付けることが出来ればよいと考えていた——と。⁽⁸⁵⁾

ところで『国家』では、「知性的思惟」「悟性的思考」「確信」「影像知覚」の順番に真実性に与ることが希薄になり、それだけ「明確性」(saphēneia)に与

ることが少なくなる、と言われている。⁽⁸⁶⁾すなわち「明確なもの」というのはプラトンにおいては、数学的明晰性に支えられて、形相間の「1と多」の必然的相互関連の中で、根拠とともに把握する能力が捉え得るものだということになる。これは、数学的頭脳には恵まれず、「信じること」に安住を求めたい「プラトン教信者」を拒否するもののように見え、また事実、こうした人々は、『国家』の理想のポリスでは統治者階層に入ることは許されず、『法律』の健全なポリスでは、自由民の仲間に入れて貰えないだろうし、また個人の内部においても、寝ぼけたようなこうした種類の魂は、「頭部」には入れないことになる。

4. ヘレニズム—ローマ時代の「明証的なもの」

本稿では、このテーマに関しては、ごく簡単なスケッチにとどめる。
まず、指摘しておきたい点を若干挙げる。

個々のものを「宇宙全体」の中に位置づけるというのは、ある意味では、探究精神にとっては当然の欲求であろう。⁽⁸⁷⁾

しかし、「世界全体」を考える材料として、考える本人がどういうものを——意識的にせよ無意識的にせよ——想定しているかによって、その人の構想する宇宙像も色付けられるようである。プラトンの場合は、多種多様な性格を持つ構成員を「配置づけて全体を統合する知的な統治者」が統治しているポリスのイメージを「宇宙全体」に投射して、宇宙像を構成したと言えるだろう。従って、ポリスにおいても、「多」がそのそれぞれの持つ性格の故に、必然的に「1」によって貫かれているところを洞察するのが「統治者」に要求されたわけであるが、宇宙全体においても、それぞれ別々の性格を持つ火、空気、水、土の四元の特性を生かしながら、これを素材として宇宙の組織を工作する造物主（デーミウールゴス、*dēmiūrgos*；原義は「職人」、「工作者」）が統合し導いている（あるいは、組み立てて作動させている）という構図で、宇宙像を描いたと言える。だから、「統合の原理」は「宇宙の外」にある。すなわち、適材を適所に

配置して全体を構成するといっても、部品の一つ一つの要求を聞くというのではなく、全体を健全に保持する方策に見通しのきく「知的な統治者」が、部品を「説得して」配置するというのが、プラトンの宇宙構図のはずだから、「統合の原理」というよりも「統合の目標」は——部品のコンセンサスにあるのではなく——世界の外側にあることになる。

但し、プラトンの場合に付け加えておかなければならないことは、現実には「部品」になり下がっている人々も、人間である限り、その内奥には、純粋な魂が潜んでおり、この純粋な魂は、世界の外の永遠の真実に触れ得る可能性を蔵しているとされていること、従ってまた、そういう純粋な魂へと純化されるなら、ほんものの魂の自由な喜びを享受し得るだろうが、理想のポリスとは、そうした純粋な魂を損ねる度合を最小限に押さえるように配慮されたものとして構想されている、ということである。

ところで、ヘレニズム時代に入ると——社会的変動による影響に関してその具体的な詳細を検討することは、ここでは控えるが——「世界全体」の語の語感も、「明証的な知」の意味も、プラトンの場合とは、あるいはアリストテレスの場合とも、違ったものが表面化して来るのが見られる。むしろ、プラトンの時代でも、アカデメイアのひとにぎりの人々以外には、「善のイデア」の正確な意味は雲を掴むものだったかも知れないし、「ディアレクティケー」の方法は奇妙な証かしの論法のように見えたかも知れない。しかし、「世界」と言えば——今日のわれわれが、この語でせいぜい「地球」しか考えないのと同様——ポリス、あるいはいくつかのポリスからなるギリシア世界と、せいぜいペルシア、エジプト近辺が「全世界」であっただろうし、また、そうした「自由人の共同体」であるポリスの精神性そのものと相容れないような例えばペルシアとの、「連合国家」というものも考えられもしなかっただろう（この点では今日もギリシア時代と大差はないと言えるだろうが）。

しかし——古きギリシア諸ポリスのコンセンサスによってでなく——マケ

ドニアの武力で、古典期とは異質な世界が現出する。こうした現象との因果関係はともかく、少なくとも、ヘレニズム時代を代表する学派の一つストア派の「世界」は「全宇宙」である。むしろ、プラトンの場合も、全天に及ぶ宇宙を「全体」として考えていたわけであるが、ポリスの統治者のイメージで考えられた宇宙の工作者は、人間の知性にも明瞭に把握され得る「数学的秩序」に従い、また、数学的方法を基礎としてその上位に立つ「ディアレクティケー」の方法（これは明らかに具体的方法として示され得るものである）によって把握され得る「多-1」の関係によって統合するものとして考えられていた。

ヘレニズム時代の思想については、われわれは本稿では単に、2世紀のセクス・エンペイリコス⁽⁸⁸⁾と、3世紀のディオゲネス・ラエルティオス⁽⁸⁹⁾が伝えていることから、適宜、若干抜き出しながら概観するにとどめたい。

ストア派の「全宇宙」は——「人間知性の把握し得る明確な秩序」に従って配置付ける、世界外の造物主によって秩序を賦課されたものではなく——気体のイメージで考えられる「火の性質を持つ技巧的な気（プネウマ）」が全面に浸透しているという図で考えられている。ここには不可入の原子もしくは幾何学的形態の物体を「外部から」配置している「工匠」は存在しない。「物体」（sōma）そのものが三次元の延長体でしかなく、全面的に浸透し合う。ストア派は「自然」（physis）⁽⁹⁰⁾というものを「技巧をもって働く火」もしくは「火の性質を持つ技巧的な気（プネウマ）」⁽⁹¹⁾とした。クリュシッポスもポセイドニオスも、「宇宙は知性と配慮に従って秩序付けられている」としていたが、これは、人間の魂（プシューケー）が身体の間々⁽⁹²⁾にまで浸透しているのと同様、「知性」も宇宙のいたるところへと浸透して行くのであるが、しかし浸透の程度には差があり、人間の「指導的部分」（プラトンの場合の、人間の「知性」もしくは「論理的部分」に相当する）には濃厚な「知性」のままの姿で浸透するが、例えば大地のような物体の場合は、これを「保持する力」（hexis）⁽⁹³⁾として働く。ストア派の世界では、神が外から秩序付ける必要はないことになる。「神」は「知性」なので

ある。そしてこの「神」は宇宙の経過として展開する「種子的ロゴス」であり、「摂理」(heimarmenē)⁽⁹⁷⁾とも呼ばれる。

プラトンの場合には、数学的な明確な関係を把握し、さらに「多と1」の関係を把握する認識能力を備えた「知性」と、外界からの刺激で印象を受けて動揺し、情動とともに空想するだけの「死すべき種類の魂」が截然と区別され、後者は「実物」——われわれが思い描く表象像の外にあるものとしての——を把握する上に障害になるものとされていた。

以上に見た限り、ストア派の自然学説は、人間の生理機能をも、岩や大地の形状を保持している力をも、自己を宇宙へと展開する「種子的ロゴス」もしくは「神」に由来するものとして位置づけており、ここに見られるのは——外から秩序を賦課している超越的な神を把握し得るのは、われわれの内奥の「知性」のみだとする緊張感や、こうした「神」に倣って現実の社会にも秩序を実現させようとする能動的な政治家の意識でなく——むしろ自然界のいたるところに神の力を見得るという安心感に満ちた畏敬であろう。⁽⁹⁸⁾

しかし「種子的ロゴス」の「ロゴス」は、数学的明晰性をもって把握されるものとは異質的である。これは「摂理」とも呼ばれ得る一種の必然性を持っており、その意味での「自然法則」と言えるであろうが、しかしこれを、方程式で記されているような、例えばニュートンの「万有引力の法則」のようなものとして見ることはできない。ストア派は、「哲学」には「自然学」「倫理学」「論理学」の三部門があるとしていたようであるが、その「論理学」に属する「規範」(kanōn)もしくは規準(kritērion)に関する部門は「真理の発見を目的として彼ら(ストア派)はこれを受け入れる」というのであるが、この部門は、「表象」(phantasiā)の様々な差異を矯正するものだから、真理の発見に役立つというのである。⁽¹⁰⁰⁾そして、やはり「論理学」に属する「ディアレクティケー」については——プラトンの場合のように「多と1」の関係を発見する方法なのではなく——「軽率な誤りを犯さない」ために必要なのである。⁽¹⁰¹⁾決め手になる

のは「表象」である。そして、夢の場合のような幻像とは異なり、「実物」(to hyparkhon) から出て、「実物」に即して、魂に刻印される表象が「把握的表象」(katalēptikē phantasiā) と呼ばれ、これが真理の判定規準となるものなのである。⁽¹⁰²⁾

以上は、ディオゲネス・ラエルティオスに従いながら、ストア派について若干スケッチしたものである。その詳細は別に改めて検討することにし、ここで一応「実物」と訳した”to hyparkhon” (ヒュパルクホン) について、今度は懷疑派セクストス・エンペイリコスに従いながら、若干述べておきたい。

ストア派が「真理の判定規準」とした「把握的表象」は、「真であって偽になることのあり得ない表象」である。⁽¹⁰³⁾ この場合、セクストス・エンペイリコスの伝えているところによると、「把握的表象は実物 (ヒュパルクホン) から、実物そのものに即して型どられ、押印されたもので、実物でないものからは生じ得ないようなものなのである。彼らは、この表象こそ最高度に対象(hypokeimena)を知覚するものであり、対象の諸属性のすべてを巧妙に写し取っているとした」という。⁽¹⁰⁴⁾

プラトンの立場から言えば、これは堂々めぐりである：——「把握的表象」とは何か？ — 「実物」を知覚するものである。 — 「実物」とは何か？ — 把握的表象によってはじめて把握されるものである、と。しかしストア派の立場からすると、「数学あるいは論理によっては前提と結論の整合性は得られるだろうが、人間の言葉や論理の整合性と、外界の実物の間に何の関係があらうか？」ということになるだろう。

実際、ストア派は、抽象論理の整合性よりも、現実生きる人間が抵抗なく同意できるか、それとも同意を躊躇せざるを得ないかで、表象の真実性（その表象が外界の対象と対応しているかどうかということ）を判定する規準としていたようであり、⁽¹⁰⁵⁾ また彼らは、感覚機能と、感覚機能を通じて生じる表象こそ、「自然」が真理認識のために人間に賦与した偉大な機能だと考えていたようで

ある。⁽¹⁰⁶⁾セクストス・エンペイリコスによると、彼らは、把握的表象は無条件的に真理の判定規準となるもの、「明証的なもの」(enarges)であり、衝撃を与えてわれわれを同意へと引きずるものと考えていた。⁽¹⁰⁷⁾

ストア派は、あらゆる点で「実物」に対応しているような「偽の表象」はあり得ないと考えていたようであるが、アカデメイア派は「把握的表象」にかきり同じような「偽の表象」は見いだされ得ると考えていたようである。⁽¹⁰⁸⁾

プラトンの場合には、数学的能力あるいは「ディアレクティケー」の能力が明瞭に把握するものを「明確」とし、感覚能力に現れるものを、明確さの度合において劣るものと考えられたのであったが、ストア派の場合、これが逆転しているように見える。実際、ヘレニズム時代以降、「論理的に把握される」ということ自体が、何か眉唾ものであるかのように考えられていたらしい形跡が、⁽¹⁰⁹⁾いろいろと見て取れる。

プラトンは『ティマイオス』で「知性の働きによって、言論(ロゴス)の助けを借りて把握される」ところの思惟の対象と、「思惑によって、言論抜き(alogos, ratio のない、つまり irrational な)感覚の助けを借りて思いなされる」ところの感覚対象とを区別していた。しかし、エピクロスは、「表象」(phantasiā)を「明証」(enargeia)だとしたと言われ、⁽¹¹⁰⁾その理由は次のようなものだったという：——「快と苦」にしても、何らかの作用者から、その作用者に即して形成されるのであって、「快」を与えるものが「快いもの」でないとか、「苦」をあたえるものが「苦しいもの」でないとかは不可能であるが、さまざまな表象にしてもこれと同様、そのそれぞれの表象を引き起こす作用者は、全面的に「表象されるもの」である。もしも、表象が、表象される実物(ヒュパルコン)から、その実物に即して形成されるような場合に「真」と言われるなら、すべての表象は、必然的に「真」である。例えば、遠方で発せられた音を聞く場合、近くで聞くよりも小さく聞こえるからといって「間違っ

見え、近くからではこれが大きくて四角に見えるとしての、視覚が誤っているわけではない。むしろ塔からやって来る影像 (eidōla) が空中を運動する際に、その端が欠け落ちたものと理解すべきである。⁽¹¹¹⁾ だから人によって、同一の感覚対象から受ける表象に相違があるのは当然で、こうした表象のどれが「真」で、どれが「偽」かを考えるところに馬鹿げた混乱が生じる。こうした場合、「思惑」が、「ロゴスなき感覚」を変造しているわけである。すべてのものの基礎は感覚の明証性なのである——⁽¹¹²⁾。

以上は、セクストス・エンペイリコスを手がかりとして、「明証的なもの」とは何かについての、ストア派とエピクロスの見解を若干覗いてみたものである。ここには、プラトンが「下位能力」とし、「真実在」を望見する上に障害になるものとして位置づけた「感覚能力」が、復権を求めて立ち上がったかのような、あるいはまた、「全体の秩序」のために、「理性的統治者」に服して沈黙を守らされていた「個人」の直接的な感受性が、王権を転覆させ、「個人の自由」を高らかに宣言しているかのような光景が見られる。

セクストス・エンペイリコス自身は、ストア派などのドグマティストのどれかに同意するのではなく、「判断保留」(epokhē, エポケー)の立場に一貫する懐疑主義者であったが、プラトンについて興味深いことを記載している。彼は、「プラトンは『ティマイオス』において、もの (pragmata) を思惟対象と感覚対象とに区別し、思惟対象はロゴスによって把握されるが、感覚対象は思惑されるものと言った後、ロゴスをもものの認識の判定規準として明確に規定した」と述べた後、次のように続けているのである：——「もっとも、プラトンはこれとともに感覚を通じての明証性をも含めている」。そしてセクストスは、われわれが上に挙げた『ティマイオス』の箇所——すなわち、「常にあるもの」と「常に生成しているもの」を区別し、後者が「感覚の助けを借りて捉えられる」として区別している箇所⁽¹¹³⁾——に言及し、次のように言っている：——プラトン派の言うところでは、プラトンの場合、[感覚の]明証性をも真理をも包括して把

握するロゴスを「共通の (koinos) ロゴス」と呼ばれるという。真理判定に際してのロゴスは、明証性から出発しなければならない。しかし、この明証性はそれだけで十分なものではない。現れているだけのものと、現れているとともに存在しているものとを判定するものが⁽¹¹⁴⁾必要だからだ——。

プラトン自身において「感覚の明証性」とは、どのように位置づけられ得るものだろうか？

われわれは、プラトンもまた「実物」と「幻像」を区別しているという点を挙げた。『ティマイオス』の以上の箇所に「共通のロゴス」を読み取ることについては、現在の古典学者は抵抗を覚えるだろうが、しかしこの点に関しても今は詳論を差し控えたい。それよりも、いったい、数学の示すある種の「明証性」は、単に整合性だけの問題なのかどうか、われわれが直接的に経験する「印象」や直接的に形成する「表象」と、「外界を認識する」とはどう関係しうるか、また、個々に独特の視点から経験し、独自の世界像を持つ人間の全人類的な「融和」ということが考えられるかといった、今日もなお問題としてあるものが、どのような背景のもとに、どのように扱われたかの一端を拾い上げたものとして、この論文を終わりたい。

[注]

- (1) 「文経論叢」第24巻第3号(1989) pp. 1—31.
- (2) Ibid. pp. 2, 11—13を参照。
- (3) 「独裁者」(tyrannos)とは、最初は民衆の味方を装いながら、やがて狼に変身する横暴な浪費者、いわば雄蜂のような存在であって、その内面には情欲(エロス)が君臨し、独裁者の人間とは、酔漢、色情狂、精神異常的性格で特徴付けられるものだと、プラトンは記している(『国家』VIII 565E—IX 577B)。
- (4) 『国家』IV 435C—441C.
- (5) 『ティマイオス』41C—42D；なお——厳密な言論としてではなく——「似た(ありそうな、もっともらしい)物語」(eikōs mýthos)として書かれたこの宇宙論の結末で、魂のなかの、頭に宿る「知的部分」を一向に用いず、胸部に宿る「怒りの部分」だけに従ってきた人間が死ぬと、頭が平べたく、四つ足の獣に生まれ変わるなどとい

った物語が軽妙な筆致で描かれている (91D-92C)。また本文でいまあげている『国家』の最後の巻では、死後の魂が、籤で引き当てた順番に従って、運命の女神に仕える神官が撒いた「生涯の見本」の中から、次の生での自分の生涯を自分で選ぶ場面が描かれている (X 614B-621B)。

- (6) 『国家』X 631B-E.
- (7) 『ティマイオス』の宇宙論では、宇宙全体の造物主は「デーミウールゴス」(dēmiurgos) であって、この造物主が人間の魂のうちの「不死なる部分」を造った後、これも自分の被造物である諸惑星(これが神々と呼ばれる)に、人体や「死すべき種類の魂」の製作を委ねたとされている (42DE, 69CD)。
- (8) 『国家』では、損なわれた魂の姿が、海中の生活のために、身体中に貝殻、海藻などが付着して、見る影もなくなっている海神グラウコスに例えられている (X 611CD)。
- (9) ここに「魂」と訳した「プシューケー」(psūkhē) がもともと「それが備わることによって身体が生きたものとなるところのもの」、つまり、「生の原理」であり、これが身体から離れると、後には物体でる身体が残され、身体から離れた「プシューケー」は影のような亡霊になるという観念があった(例: 『オデュッセイア』XI)。
- (10) 『国家』V 473C-E; 『法律』IV 709E-712A, 『書簡集』326ABを参照。
- (11) 『国家』IV 442AB, IX 568C.
- (12) 同書 IV 428E他。
- (13) 同書 I 343A. 上掲論文(『紀要』24-3) pp.12-13を参照。
- (14) 同論文 p.13を参照。なおソクラテスに対するトラシマコスやカリクレスのこうした反応は、今日の大学の「哲学」の教師に対する、現実の政治家や実業家などの反応と似ていると言えるだろう。
- (15) 『国家』V 473E-474A.
- (16) 同書 VI 489A-D; 『書簡集』328E他。
- (17) 同書 VIII, IXを参照。
- (18) 同書 VI 488A-489A.
- (19) 同書 VII 523C-525B.
- (20) 『法律』VII 817E-818E.
- (21) 『国家』IX 592B.
- (22) 『パイドン』66CD.
- (23) 『国家』II 373D.
- (24) 『テアイテトス』176A. 172A-177Cの議論を参照。
- (25) 『国家』VII 520AB. 「洞窟の比喩」(ibid. 514A-517A)を参照。
- (26) 『ティマイオス』70D-71D. その他、人体における「魂の死すべき部分」の配置と、人体諸器官の役割については、69C-72Dを参照。
- (27) アリストテレス『政治学』II 2, 1261a, 22ff.

- (28) 同書, I, 5, 1254 b 2 ff. なおアリストテレスは「人間でありながら, その本性によって自分自身に属するのではなく他人に属する者, これが本性上の奴隷である」と言っている(同書 I, 4, 1254 a, 14—15)。
- (29) なお, 注(5), (7), (8)を参照。
- (30) 『国家』IV 421D—422A, VIII 550D—553Aその他; 『法律』III 688C—679C, V 744D, IX 919Bその他。
- (31) 『国家』III 415D—417B, V 457D—461E。
- (32) 『法律』V 742A—745B。アリストテレスの奴隷についての見解や, プラトンの貧富に関する見解あるいは財産制限の提案などについては, 筆者は「嫉妬」と題する別の論文(岩波「現代哲学の冒険」3『差別』の巻(1990)所収)で若干論じた。
- (33) 『国家』では, ソクラテスが, パンと葡萄酒, デザートには無花果や空豆で過ごすという, 理想のポリスでの簡素な生活を, 楽しくて健康なものだと言うのに対し, 対話相手の若きグラウコンは, それじゃ, 豚の飼料と変わらないではありませんかと情けながらのであるが, このグラウコンの言う「普通の生活」——香や菓子, 肉料理の食生活のほか, 刺繍の施された衣服を身につけ, 俳優, 興業師, 理髪師などが必要とされるような生活——が, ソクラテスにとっては「熱でふくれあがったポリス」であり, 生活が複雑になるに応じて病気も増え, 医者も必要になるという不健康なポリスなのである(II 372A—373D)。
- (34) アリストテレスは『政治学』IIの第1—5章で, プラトンの『国家』での財産・妻子の共有の構想を批判している。旅行仲間云々の箇所は5, 1263 a 17—19, 肉親の愛情が希薄になる云々の箇所は, 4, 1262 b 14—24。そして, この同じ『政治学』II 6では, 『法律』についても, 基本的には『国家』と大差はないとし, また, 『法律』の選挙規定に欠陥があるとか, 対外関係を一向に論じていないなどとして批判している。
- (35) アリストテレス『政治学』I 5, 1254 b, 6—9。
- (36) 同 1254 b, 16—23。
- (37) 9000年前に理想のポリスとして現実に存在したという太古のアテナイを想定して書かれた『クリティアス』は未完に終わったが, これの序論をなすものとして書かれた『ティマイオス』(27A Bを参照)が, 自然世界に生きる身体的存在である「人間」の構造を, 宇宙の構造と関連付けようとしているものであることは言うまでもない。但し, 認識論や存在論の上で, 中期著作の『国家』と, 後期の『ソピステス』や『ピレボス』とでは, 少なくとも表現の仕方や, 強調の置き方に相違があり, 『ティマイオス』の特殊な用語を解釈する場合にも, これを中期著作の『国家』の存在論・認識論に引き付けて解釈するか, 後期著作のそれに引き付けて解釈するかで違って読み取れるものも少なくない。しかし今の場合, われわれは『ティマイオス』の執筆年代にも, また解釈上, 疑義の残る点の詳細には触れないでおく。
- (38) 『ティマイオス』57D—58C。この箇所を概括すると次の通りである:——「動」は不均等に由来し, 「静」は均等に由来する。ところで, 宇宙は, 火, 空気, 水, 土とい

った物体で満ちて、種類別に分かれる傾向がある。しかるに、天の回転運動として顕現する「宇宙の魂」が、以上のような諸物体を束ねて縛り付け、従って、内部の諸物体はひしめき合うことになり、例えば小粒の火が大型の空気と隣接すると、これを分解して、空気1個分から火2個を作り出すなどして、変化・動揺が絶えず生み出され、こうして「不均等」が絶えず生み出され、「絶えざる動き」をもたらしことになる、というのである。そして「不均等」が「動」の原因だとする図式は、原子論者デモクリトスのそれを思わせるものである（アリストテレス：断片「デモクリトスについて」[ap. Simplicium de caelo 295, 9] を参照）。

- (39) 『バイドロス』245 D E.
- (40) 『法律』X 894 E—896 B.
- (41) 同巻896 C—897 B.
- (42) 同巻897 C—899 B.
- (43) 『バイドン』96 A—99 C.
- (44) 『ティマイオス』では、宇宙の魂は、「天の赤道」と「黄道」の運動に顕現し、後者は音階に対応して区切られているのであるが、この二つに対応する回転運動が、われわれの頭部にも宿っているとされている。幻想的とも見えるこの図式の詳細については、ここでは立ち入らないが、ただ、神が人間に「視覚」を賦与した意図として次のようなことが述べられていて点だけを挙げておきたい：——天球の日周運動や黄道上の太陽の年周運動の循環が「視覚」によって見られたからこそ、「数」が案じ出され、「時間」の観念と、宇宙の本性は何かという探究がわれわれに与えられたのである。そして神がわれわれに「視覚」を考案して贈った目的は、われわれが天の知性の循環運動を観察して、この整然たる運動を、前者と同族ではあるが乱れている、われわれの思考の運動を立て直すように、ということなのである（47 A—C）。

『国家』において、守備者の教育に数学が必要だとされている点は本文で述べたが、『法律』からも若干挙げておく：——自由民に必要な学問として体育、読み書きなどのほか、数学、幾何学、天文学があり、詳細にわたっての研究は少数者だけでよいが、しかし一般人も、それを知らないでいるのは恥ずかしいという最低限度は学ばなければならないほど、これら数学的学問には「神的必然性」がある。数を数えることも知らず、星々の運航についても無知であるような人が、最高の学問に若干でも触れるなど、どうして可能だろうか（VII 817 E—818 D）。

なお「音楽」については、われわれの内なる魂の運動が天球や惑星の運動と対応していること、惑星の軌道もしくは運動が、音階を表す比率に対応しているとされていることは上に挙げたが——ピュタゴラス派の天体音楽と関係があるのだろうが、ここに挙げられている全音（9/8）、半音（256/243）の系列（拙訳『ティマイオス』岩波「プラトン全集」12 補注Cを参照）が惑星もしくはその軌道の何に対応するのかは定かでない——いずれにしても、われわれの内なる思考もしくは知性の回転運動も、音階を表す分節を持つ天体の軌道に対応すると考えられていると言える。そして『国家』

でも、リズムと旋律 (harmonia) は、何ものにもまして魂の内奥へと深く浸透して、何ものよりも力強く魂を掴むものと言われ(III 401D)、イオニア調やリュディア調のある種のものは「弛緩した」と言われているが(同398E)、このような旋律はポリスの守備者の教育にはふさわしくないとか、旋律とリズムの善し悪しが人間の品性と密接に結び付いているとかいった議論が展開され(同 398D—403C)、『法律』でも、市民の教育に「音楽」がどれほど重要な位置を占めるかについて、「人が音楽の扱いを誤ると、悪しき習性を好んで受け入れるようになり、最大の害を蒙る」(II 669BC)と言われ、さらに、ポリスの中で音楽に携わる人は、リズムと旋律に鋭敏な感覚と認識を持たなければならないのだとして、その際、音楽の素養に必要な規準としてドリス調を理解する感覚を擧げている(同 670B)。

- (45) 数学・音楽の世界と「協調」や「秩序」の関係については、ここでは、少なくとも『ティマイオス』で、「知的な造物主」が無秩序に動揺する素材に秩序を与えたとし(30A)、例えば火、空気、水、土の間に「比例関係」(火：空気＝空気：水、空気：水＝水：土)が成り立つようにしたと言われていること(32B、もっともこの比例式が、火、空気などの量に対応するのか、何に対応するのか一向に明言されていない。プラトンが別の箇所では、これら四物体の相互変換を説明するために、この各々に幾何学的正多面体の形態を与えている点については、注(38)を参照)、そして、こうした数学的要素の導入を通じて、彼が、例えば「比例による両端項の結合」といった「結合」を、この自然世界に見て取ろうとしていること(32BC、その他の箇所についてはここでは省略する)は強調されてよいだろう。
- (46) 「ディアレクティケー」(dialektikē)——「問答法」と訳される——とは「1」と「多」の関係を把握するもののだとして、『パイドロス』では、パイドロスが披瀝した、弁論家リュシアスの弁論のテーマである、「エロース」(恋)が、単なる無分別の狂気なのか、天上の美を希求する神憑りの狂気なのかをめぐって話が錯綜するよう見えたとき、ソクラテスが、例えば同じく「エロース」と呼ばれているものにもいくつかの種類が考えられ、それらがまた一つの本質的な「相」を持っていたのだとして、「言論の技術」とは次のようなものだとし、その出来る人が「ディアレクティケー」を身につけた者というのだ、と言っている：——これは二つの手続きから成り、その一つは「多様に散らばっているものを総観して、これをただ一つの相 (idea) へとまとめること」、もう一つはこれとは逆に「自然本来の分節に従って切り分けながらさまざまな種類 (eidē) に分割することが出来るということ」である(265D、E、266BC)。

『ソピステス』ではまた、ソフィストの技術というものは、狩猟の技術で言えば、「金持ちの青年を狙う狩猟術」として位置づけられ、商取引の技術としては、徳に関する知識を切り売りする「学識の販売術」、また、製作技術の中では「見かけだけの影像を作り出す手手術」に位置づけられるとしながら(218B—236C)、結局、ソフィストは虚偽を製造し販売するものとして位置づけられ得ると言うのであるが、しかし、全くの「あらぬもの」は存在しもしないし、考えられもしないというのが、エレア派の立場

である。すると「虚偽」(pseudos)が存在すると言うこと、すなわち、「あらぬもの」(to mē on, 非有)が「ある」ということを前提にしての発言はどうなるのかが問題となり(237A)、結局、「虚偽」とは、実際に「ある」のとは「異なっている」ところの「ある」ものを語っている言表なのだ(263B)と言われるのであるが、こうした結論に先だって、「ある」(有)とか「あらぬ」(非有)とかを吟味しながら、この両者に、「動」と「静」と「異」を加えて、次のような議論が展開される：「動」と「静」は正反対であるが、双方とも同等に「ある」。しかし双方とも「ある」からと言って、その双方ともに、あるいは各々が「動いている」とか「静止している」とか言ってよいことにはならない。つまり「有」は前二者に並ぶ第三のものであって、その「有」のもとに「静」と「動」が包み込まれるという形で、「有」がこれらを含んでいるのであり、つまり、「動」も「静」も、「有」に関与していること(koinōniā)に着目して、「動」と「静」がともに「ある」と言表されるのである(250A B)。

そして、こうした議論の中で、「ディアレクティケー」の方法を身につけた人について、次のように言われている：——こうした人は「一つのアイデア(idea, 「形相」あるいは「類」)が、個々では離ればなれにある多くのものを貫いていたところに延び広がっているのを、そして互いに異なっている多くのアイデアが、一つのアイデアによって外から包み込まれているのを、そしてさらに、一つのアイデアが、全体をなすものの多くを貫きながら一つに統一されているのを、そして多くのアイデアが離ればなれになって完全に区別されているのを、充分に感知しているのだ」(253D)。

なお『国家』の場合の「ディアレクティケー」については第3節で言及する。

- (47) 以上『ティマイオス』27E—29B。
- (48) 同書29E—30A。
- (49) 『パイドン』99C Dを参照。
- (50) 『ティマイオス』29B—Dを参照。
- (51) 同書57C—64A。「陶器」や「塩」の説明は60D E。
- (52) 同書53B。
- (53) 注(38), (45)を参照。
- (54) 『ティマイオス』48A。
- (55) 第1節を参照。なお注(26)を参照。
- (56) 『ティマイオス』のうち、人体の構成とメカニズムに関する箇所は72B—81E。髄や骨の説明は73B—74A。
- (57) 上掲、拙訳『ティマイオス』、補注Kを参照。
- (58) 『ティマイオス』70A—71A。
- (59) 『ティマイオス』の病理学説は81E—87B、このうち86B—87Bは精神面の病気に関するものであり、また養生訓とも言うべき部分は87C—90Dに述べられている。
- (60) 上掲、拙訳『ティマイオス』補注Lを参照。
- (61) 注(45)を参照。

- (62) 『法律』においては、次のように言われている：「富は贅沢によって人間の魂を墮落させ、貧困は苦痛によって魂を恥知らずな行動へ駆り立てる。すると、分別を備えたポリスでは、この病氣に対する救済策になるものは何だろうか。それはまず、小売業に携わる者の数を出来るだけ少なくすることである。次には、当人が墮落してもポリスにとって大した痛手にならないような人間に小売業を任せることである。第三に、そのような仕事に携わる者に対して、彼らの性格が容易に恥知らずになったり卑屈になったりしないようにする方策を見いだしてやることである」(XI 919B—D)

また、真に健全であるべきポリスの自由民について「彼らは一人たりとも、自発的にであろうとなかろうと、小売業者にも貿易商にもなってはならない」と言うのである(同919D)。

- (63) 『国家』IX 586A—Cを参照。もう少し補うと次の通りである：「彼ら(無思慮な連中)は、真の存在によってほんとうに満たされたこともなく、確実で純粋な快樂を味わったこともない。むしろ家畜のするように、いつも目を下に向けて地面へ、食卓へとかがみこみ、餌を漁ったり交尾したりしながら身を肥しているのだ。そしてそういったものを他人より少しでも多くかち取ろうとして、鉄の角や蹄で蹴り合いしては、いつまでも満たされることのない欲望のために、互いに殺し合うのだ。ほかでもない、いくら満たそうとしても、彼らはほんとうに存在するものによって自分を満たすのではないし、また自己の内なる真に存在する部分、取り入れたものをしっかり持ちこたえることの出来る部分を満たすのではないからだ。……だからまた、必然的に、彼らがなじんでいるさまざまな快樂というものも、苦痛と混じり合った快樂に過ぎず、真の快樂の幻影であり、陰影によってまことらしく仕上げられた書割の絵のようなものだ。そうした快樂は、苦痛との相互併置によって色付けを与えられているために、どちらも際だって強烈なものに見え、自分に対する気違いじみた欲情を愚かな人々の心に生みつけて、彼らをしてこの幻影を目当てに戦わせることになるのだ」。

身体における「欠乏」から「充足」への移行が「快樂」として現れ、「充足」から「欠乏」への移行が「苦痛」として現れるということ、従って、こうした「快樂」と「苦痛」とは表裏をなすもので、一方が止むと他方も止むといった議論は『ゴルギアス』にも見られる(496C—497C)。そこでは、カリクレスは、何かに隷属している者は幸福ではありえない、能力のある者なら、自分の欲望を抑えることなく、出来るだけ欲望を拡大して、そうした欲望に、勇気と思慮をもって十分に奉仕するのが自然本来において立派なこと、正しいことなのだ、と主張するが(491E—492A)、これに対して、ソクラテスはそのような生活を、大食で食べるが早いか排泄するという鳥カドリオンの生活になぞらえ、また、疥癬にかかって掻いている人の生活になぞらえたりする(494B C)。

『ピレボス』においても、身体の欠乏→充足、充足→欠乏に伴うものを「快苦」の一つの種類だとするのであるが(31B—32B)、ここでも疥癬の例が挙げられて、そこには「快苦」の混合があるのだとされ(46A)、直接身体に由来するのではない領域、す

なわち悲劇を観劇して泣きながら快感を覚えるといった場合のように、魂だけの領域で起こる情動にも、快苦の混合が見られるのだと、プラトンは分析している（48A—50B）。

- (64) 『国家』に見られる、独裁者の性格の形成過程や性格描写の叙述（Ⅷ—Ⅸ）、『パイドロス』に描かれている、少年愛の「恋」にとりつかれた男の狂態（237B—241D）や、これと対照的に、少年の美から天上の「美」への本物のエロスに身も心も惑乱する男の心理状態の描写（251C—252C）、あるいは、前注に挙げた『ピレボス』での情動の分析もその例である。
- (65) Whitehead, A. N.: "Adventures of Ideas", 特にその第Ⅰ部を参照。なお若干引用しておく：「一般的な観念 (general idea) は、表現されているにせよ、あるいは意識の表面のすぐ下に暗黙のうちに潜在してあるにせよ、とにかくそれは、次々と相次ぐ特殊な表現に自らを具体化して行く。それは身を屈してその一般性の偉容を失うことになるが、特定の時代の具体的状況への特有の適応力は増すことになる。この一般的な観念は、隠れた推進力であり、人類の心から去ることなく、いつもその時代の不安な良心に訴えることによって行為に強制を加えるという、特殊化された姿を装って現れるのである」Ⅱ 4. (New York, 1967, p.16)
- (66) 『パイドロス』250D—252C.
- (67) 『饗宴』210A—211D.
- (68) Whitehead: op. cit. I 1, (p.4) .
- (69) Bergson, H.: "Les deux Sources de la Morale et de la Religion". 特に第4章 (Paris 1969, pp.28 3ff.) .
- (70) 『テアイテトス』では、各人に現れているものが、その人にとって「あり」もするという、プロタゴラスの「万物の尺度は人間」という説に対して、それだけのことなら、万物の尺度は豚だとか狒々だとかでも差し支えないのではないかとソクラテスが批判している箇所がある（161C）。そして、「一つのポリスが、〈正しい〉》と思って法律に制定したことは、これを制定したポリスにとって、それがそのように制定されている限り、〈正しい〉》ものでありもする」というプロタゴラス説に対して、ソクラテスは次のように批判する：——しかし、ポリスが何らかの政策を「有益」と判断する場合、「有益」というのは将来を見通して言えることなのだから、ポリスが「有益」と思って定めたことが、定められてあるだけの期間、どんなことがあっても「有益」でありもするなどと押し切る勇気のある人はいないだろう、と（177D—178A）。つまり、各人がその場で「思っている」ことは各人各様であって、誰も互いに、相手に「現れているいること」を批判することは出来ないが（自分が旨いと思う酒を、隣人が苦いと言うとしても、隣人に苦く感じられていることは誰も否定できもせず、隣人が錯覚しているわけでもないのである）、ただ将来を見通しての判断において、明らかに失策としか言えない政策までも、当局が「有益」と思っている」限り、「有益でありもする」などと頑強に言い張る人間はいないはずだというのが、ソクラテスの言う意味である。

つまり、これは、例えば経済破綻によって苦境に喘ぐという現実には直面しながらも、なおもその政策を「有益」としている政府に、「なるほど、これも有益と仰るからには、その通りでしょう」と納得する人はいないということを前提にした議論と言える。

(71) 『ゴルギアス』 455 E.

(72) 同書 452 E.

(73) 例：『国家』 VIII 470 D, 556 E；『法律』 V 744 D.

(74) 『ゴルギアス』 464 B—465 D.

(75) 『国家』 VI 509 D—511 E.

(76) 同書, VII 514 A—521 B（洞窟の比喩）を参照。

(77) パルメニデス 断片 2—8 (DK 28 B, 1—8, 1.49)。

(78) 『国家』 X 597 B—598 D.

(79) 同書, VII 525 A B. なおこの点に関しては、第 1 節でも触れた (p.5)。

(80) 同 525 B.

(81) 同書, VI 510 C—511 A.

(82) 同, 511 B—D.

(83) 注(46)を参照。

(84) 『国家』 VI 511 B C, D.

(85) このように解すると、ホワイテヘッドの構想と類似して来る。ホワイテヘッドは、無数と言ってよい純粋な抽象的科学（射影幾何学など）がなお未発達な状況にあり、こうした多くの科学を、「自然」は例証していると言い、「われわれがこうした例証に盲目なのは、そうした新しい規則の型に無知だからである」と言っている（上掲書, VIII 9, p.138）。

そして、このように考えると、『ティマイオス』の宇宙論が、きわめて空想的・遊戯的に見えるとしても、少なくとも万物を包括しながら円運動を行う「宇宙全体」や数比に従いながら回転する「天体運動」、あるいは幾何学的形態の四元の相互変換の発想などが、「数学的に相互に関連しながら全体をなしている」という宇宙像を構想しようとしての試論だとして位置づけることが出来る。

(86) 『国家』 VI 511 E.

(87) 限られた視野の中に意識的に自分を閉じ込める「節度ある学者」が、専門領域を外れると、節度をもって黙っているどころか、逆に、粗雑で幼稚な発想を恥も外聞もなく言い散らす場面も珍しくない。誰にしても、ほとんど無意識的に、自分の日常語の背後に、その語の意味の背景となっている「世界」を前提にしているものである。そして、自分にとっては水か空気のように自然な環境をなしている、その「背景」も、他の角度からみればどれほど奇妙なものかに気付かないものである。そして気付かなければ気付かないほど、自分を規準として「人間というものとは異なるものだ」とか「哲学というものとは異なるものだ」とか、一般化して定義しがちである。プラトンもホワイテヘッドも、これを問題にしたのであるが、これについて

は立ち入らないでおく。

- (88) 『ティマイオス』には、この宇宙は「知性」(nūs)が「必然」(anankē)を「説得すること」によって、この宇宙は形成された、という言葉が見えている(48A)。因に、ホワイトヘッドは、人類が野蛮から文明へ推移してきた道程を跡付けながら、以上のプラトンの言葉を「文明的秩序の世界の創造は力に対する説得の勝利だ」という言葉に置き換え、プラトンのこうした発言は正しかったと言う(op. cit. II 8, P. 25.)。
- (89) Diogenes Laertius: Vitae Philosophorum. テキストは Hicks, R. D. の校本(The Loeb Classical Library)を使用する。
- (90) Sextus Empiricus. ここで参照するのは Adversusu Mathematicos VII である。テキストとしては、Bury, R. G. のもの(The Loeb Classical Library)を使用する。(Adv. Math. のうちの上記の巻は、Bury の "Sextus Empiricus" II に収められており、"Against the Logician" I に該当する。)
- (91) D. L. VII 156.
- (92) Ibid. 135.
- (93) Ibid. 151. ここではストア派は次のように考えていたと伝えられている：「混合(krāsis)についてクリュシッポスが『自然学』IIIで主張しているところでは、これは徹底的な混合として起こるのであって、混合し合うそれぞれの一が他を取り巻くとか、相互に隣接し合うという形で混合するのではない。葡萄酒を僅かでも海に投入すると、一定の時間の間浸透し合って、それから融合するだろう」。
- (94) "physis"というギリシア語は、「本来あるがままの姿」を指し、医学の面でも「回復力」を意味したり、アリストテレスの場合は、動植物や四元といった自然的物体の中にあって、それらの(強制によらないという意味での)自然的な運動を起こしている原理もしくは力が、「自然」と呼ばれている。拙稿「ギリシアにおける自然哲学とコスモロジー」(新岩波講座「哲学」5『自然とコスモス』1985所収)を参照していただければ幸甚である。
- (95) D. L.: op. cit. VII 156.
- (96) Ibid. 138—139.
- (97) Ibid. 135—136. なお、以上のようなストア派の自然学説については、筆者は「ストア派の自然観」(『古代の自然観』上智大学中性思想研究所編「中世研究」6 1989所収)で若干論じた。
- (98) 同論文で引用したエピクテトスの一節をここでも引用しておく：——「偉大なるかな神……神は手を与え、喉を与え、胃を与え、知らぬ間に成長させ、眠りながら呼吸させたまえり」(Diatribai I 16)。なお同論文のこの箇所(pp. 73—74)を参照。
- (99) D. L. op. cit. VII 38—39.
- (100) Ibid. 41—42.
- (101) Ibid. 46—47.
- (102) Ibid. 54, cf. 50.

- (103) Sextus Empiricus: *Adversus Mathematicos* VII 152.
- (104) *Ibid.* 248.
- (105) ストア派は、表象にも「蓋然的なもの」と「蓋然的でないもの」などがあるとして分類している際に、「蓋然的なもの」とは魂に滑らかな運動を作り出すもので、例えば、今は「昼である」というのがそれであり、他方「蓋然的でないもの」とは「もしも昼ならば、太陽は地平線上にはない」といったものである (S. E.: *op. cit.* 242—243)。こうした例は「命題」に違いないが、ストア派によると「表象」が先行し、次いで自己表現をする「思考」(*dianoia*) が、表象から経験する (*paskhei*) ものを言葉 (*logos*) で表出するのである (D. L. *op. cit.* VII 49)。
- (106) S. E.: *op. cit.* VII 259.
- (107) *Ibid.* 257.
- (108) *Ibid.* 252. 誰かが、自分の友人が側にいるかのようなきわめて鮮明な像を見て、その友人に話しかけることさえしたが、後になって、その時刻には当の友人は死んでいたことが判明したというような場合、アカデメイア派によれば、後で判明したことによって推測しない限り、見た像が虚偽のものであったかどうかは判定できないことになる。しかしストア派の場合は、一見堂々めぐりのように見える論法（把握的表象は実物とかつきり対応するから把握的なのだ、そしてその実物は把握的表象によって捉えられるから実物なのだ、という循環論法）の裏に、外界からの刺激を受け、衝撃を受けているような、はっきり醒めている精神状態と、影像是鮮明だがどこか帳尻の合っていないような何か不安定な精神状態を区別していたように思われるが、この点は別の機会に検討する。
- (109) プラトンの時代にも、ソフィスト的「問答競技」の流行とともに、「言論嫌い」（ミソロギア）の風潮があったこと、プラトン自身、その「言論嫌い」を克服しようとしたものであることについては、筆者は、本紀要の別の巻で検討した（「文経論藻」第22巻第3号1987, pp. 1—32）。
- (110) S. E.: *op. cit.* VII 203.
- (111) 物が見えるのは、その物から「影像」がやって来るからだという視覚理論が古代ギリシアを通じてあったが、今はその詳細には立ち入らない。ここではむしろ、エピクロスが、今日の用語で言えば、例えば外界の対象が網膜にまでやって来る時にどのように変化するかという物理的法則の中で、視覚像を考えているのだと解しておきたい。
- (112) 以上, S. E.: *op. cit.* VII 203—216.
- (113) 第2節及び注(47)を参照。
- (114) S. E.: *ibid.* 141—144.